

あらくさ句会・令和二年二月例会 選評

【日時】令和二年二月二十九日（土）

【句会】新型コロナウィルスを避けて誌上句会とした。

選句はメール等によった。

【投句者】眸子、温智、嶋尾、所山、三省、万里、りな、軽博、

開九、凡生、至茶、浪知、白塵、耕田、英堂、一笑、

曲枝、素乱、伸行、端石、陸奥海、丁夫（二十二名）

【選句者】眸子、温智、嶋尾、所山、三省、万里、りな、軽博、

開九、凡生、至茶、浪知、白塵、耕田、英堂、一笑、

曲枝、素乱、伸行、端石、陸奥海、丁夫、好高

（二十三名）

【兼題】「葛湯」

【投句】四句投句 【選句】七句選

《あらくさ選評》 稲田眸子

せり鍋やまだ一年という仲居

曲枝

芹は春の七草に数えられ「古事記」や「万葉集」にも記述がみられる日本原産の作物。名取市での栽培の歴史は古く、約四百年前に遡る。名取川の伏流水が湧き上がる余田地区では、豊富な地下水を利用して栽培が行われ、「仙台せり」のブランドで市場の高い評価を得ている。根つこの部分まで丸ごと食べる「せり鍋」は仙台名物。仙台を旅した作者は、夕食にその「せり鍋」を食べたのであろう。「せり鍋」をつつきながら、一献傾けたのであろう作者の印象に残ったのは、「せり鍋」の味ではなく、その鍋を配膳してくれた若い仲居さんと交わした会話であったのだ。「まだ一年という」措辞は芹のしゃきしゃき感に通じるようだ。「せり鍋」と「仲居」の見事な取合せの一句である。

湯たんぽや今日の出来事温める

りな

じんわりとした温かさで、日本で昔から愛されてきた「湯たんぽ」。お湯を注ぐだけで電氣を使わず朝まであったかというエコの観点だけでなく、肌を乾燥させずに、体をじんわりと温めてくれる湯たんぽは、女性の大敵「冷え」にもぴったりだ。

深夜、ベッドの中に忍び込み、湯たんぽで温まった布団の中で、今日の出来事を振り返っている作者。辛く悲しい出来事も、じんわりとした温かさでほぐしてくれたに違いない。おやすみなさい…。

母の温み五臓六腑に葛湯かな

温智

葛には体を温める効果や解熱発汗作用、整腸作用等様々な効果があるので、幼い頃、母が葛湯をつくってくれた。葛粉を水で溶いて砂糖を加え、鍋等で緩やかに加熱しながら透明になるまで練つてくれた母。ぬくもりと甘みが懐かしい。

食べたい物は何でも食べられる今の時代となり、葛湯の有難さも忘れがちであるが、ふと口にした葛湯。いまでは成人し、孫をもつ身となったが、葛湯を口にした途端、幼かった頃の母の思い出の一齣が鮮やかに思い出されたのであろう。

母の深い愛に包まれ、慈しまれたからこそ、今の自分があるのだ、母のぬくもりが堪らなく懐かしい…。その思いを「母の温み五臓六腑」と表現したのだ。

孫来れば夫婦喧嘩も春うらら

伸行

「孫ができるまでは何とも思わなかったが、孫が産まれた今では孫は目の中に入れても痛くないで、可愛くてしょうがないよ」と爺、婆からよく聞く。この句は、夫婦喧嘩をしてお互いにぎくしゃくしていたが、お孫さんがやってくると、夫婦喧嘩をしていたことも忘

れてしまい、お孫さんを囲んで楽しいひと時を過ごしたよ、という句。ご夫婦にとつて、「春うらら」な余生であつてほしいと切に願っている。

妙案の浮かび朝寝を中断す

丁夫

何か困った時に、いいアイディアが出されたら「それは妙案ですね」という風を使うことがある。「妙案」は「他の人がなかなか思いつかないような良い考え」のこと。よく似た言葉に「良案」「名案」がある。「良案」は「それでうまくいくような良い考え」、「名案」は「みんなが感心するような良い考え」だそうだ。せっかくの朝寝を中断するほどの「妙案」、その内容をぜひお聞きしたいものである。ここまで書いてきて、この妙案とは、仕事のことではなく、俳句ことでは、思ったのは筆者だけであろうか。

貝の皿夫が供える雛あられ

万里

お腹の中の赤ちゃんは、全身で音を感じ取っているという。貝達も波の音を聞きながら育つたに違いない。「貝の皿」という言葉からそんなことを想像した。

お雛様の日に飾る雛あられは、赤、白、緑の三色の色がついていることに気づく。赤は生命のイメージ、白は雪のイメージ、緑は木々の息吹いている新芽のイメージとのこと。健やかに成長してほしいとの願いが込められているようだ。

波音が聞こえてきそうな貝のお皿に、三色の雛あられを飾ったご主人様。きっとロマンチストに違いない。

スマホ鳴る何所で鳴りぬ春の闇

至茶

早春から晩春、夜の感触は時間を追うごとに変化する。春の闇は、

夏や秋や冬の闇と比べ、どこか潤んだような、白々とした光りの洩れる闇夜のイメージがする。

スマートフォンが登場から十年余。今や私達の生活に欠かせないし機器となった。いまや誰もが持っているといつても過言ではない「文明の利器」となったのである。

掲句は、家のどこかに置き忘れたスマホが鳴っていることを表現したかったのではない。もつと深い、そう、白々とした光りの洩れる闇夜の中で発する文明の声のような気がする。

◇この一句◇ 卷淵伸行

槌音に揺さぶられある霜柱

眸子

建設現場となった広い野っぱら。ドシンドシンと槌音響く冬の朝の遠景が目に入る。作者は、通勤途中そこを通りかかったのだろう、足元には、霜柱が揺れていた。

視界が高さのある作業場の遠景から、足元の揺れている霜柱に移っていく様を切り取った素晴らしい句。

カメラワークの流れが霜柱にズームインし、冬の厳しさで締める様が見事である。

◇あの一句◇ 溝内端石

妙案の浮かび朝寝を中断す

丁夫

季語は朝寝。春の季語。朝遅くまで布団やベッドの中に長くいること。仲間には毎日が朝寝という人も多くなってきたが、そうではない人にとっては至福の時間の筈。お疲れ様です。

ところで、妙案とは何か。好みの女子への一言か、嫌な仕事や誘いへの断り方か、半覚醒状態でトロトロ夢見つつ、あれやこれやと

意識が気ままに飛び交うのはなにやら心地よいもの。もし、作句に悩んでの思案であるならこちらも大いに見習わなければ。睡眠を中断して、句帳などに思いついたアイデアを走り書きする姿勢を。

◇さらにもう一句◇ 藤田素乱

老木の枝にゆとりの梅三分

曲枝

花見と言えば今は桜ですが、奈良時代は梅でした。花見とは、梅を見ながら歌を詠むことでした。これは、「令和」の由来となったのが、「万葉集」の梅花の歌の三十二首の序文であることから有名になりました。一方の桜は、「さくら」の語源としては、「さ」は「田の神様」を意味し、「くら」は神様の居場所である「御座」を意味すると言う説もあるように、桜も愛されてきました。

ついつい、梅と桜を比べたくなりますが、梅は、桜の華やかさに比べ、清楚な感じがします。木の大きさも小さく、咲く花の数もずっと少なめです。そのような梅ですが、老木になるとさらに咲く花の数が少なくなるのでしょうか。慎重しく咲く老木の梅、それ故にこそ花が引き立ちます。散歩がてら人の庭に咲いている梅を見つけると心が癒されます。咲き誇るのではなく健気に咲く老木の梅もよいものです。